

遺跡出土植物遺体からみた 縄文時代の森林資源利用

Management of Forest Resources during the Jomon Period in Japan
Deduced from Excavated Plant Remains

能城修一・佐々木由香

NOSHIRO Shuichi and SASAKI Yuka

はじめに

- ① 縄文文化とクリ利用の結びつき
- ② 縄文時代のクリ資源管理
- ③ 縄文時代におけるウルシの導入と利用
- ④ 縄文時代における種実類の利用
- ⑤ 縄文時代における外来植物の移入とマメ類の栽培化
- ⑥ 木材でも種実でもない森林資源利用としての編組製品
- ⑦ 縄文時代の森林資源管理のモデル

【論文要旨】

本論では、1980年代以降に行われた低湿地遺跡の発掘調査の成果をもとに、木材と種実遺体を中心として植物利用に関する研究成果を総覧し、縄文時代における森林および植物資源の管理と利用を概観する。この約30年の研究によって、縄文時代の人々は単なる狩猟・採集民ではなく、少なくとも前期以降の東日本を中心とした10年以上定住した集落では、クリとウルシを中心として、集落周辺の森林資源を管理して利用していたことが明らかとなった。クリが選択されて利用されたのは果実と木材が有用で活用しやすいだけでなく、クリの木が石斧を利用する当時の伐採技術に適していたという面でも選択されていた。ウルシの樹液を用いた漆器の製作と木材の利用は、前期以降、東日本を中心とする地域には普遍的に認められ、木と技術が前期以前に中国大陸からもたらされたことを示唆している。縄文時代の人々は、中期頃以降、クリやウルシの利用に加えて、アク抜きが難しいトチノキを加工する技術を獲得し、これを水辺の施設で加工して利用することで、より重層化した植物資源利用を行っていた。中期頃には有用な品種の選抜も行われるようになり、クリやマメ類（アズキ亜属、ダイズ属）では、現在の栽培品種に匹敵する大きさの種子をつけるものも利用されていた。早期でも、類例はわずかであるが、植物性素材の選抜は明瞭に行われており、また日本列島外から植物が移入されていたことが明らかとなっている。九州地方では、編組製品の素材の選抜が早期に確立されており、後期までは引き継がれていた。最後に、総括として、東日本を中心とした地域における森林資源の管理と利用の様相を集落の立地との関連で復元し、西日本を中心とした地域における森林資源管理と比較して考察した。

【キーワード】 資源管理, 選択, 栽培, 移入, 複合的利用